

路上の人

路上の人

堀田善衛

新潮社

ろじよう ひと
路上の人



●著者 堀田善衛 (ほったよしえ) ●発行者 佐藤亮一

●印刷所 錦明印刷株式会社 ●製本所 加藤製本株式会社 ●発行所 株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71 振替 東京4-808

電話 業務部(03)266-5111 編集部(03)266-5411

●1985年4月20日印刷 ●1985年4月25日発行

定価1600円

© Yoshie Hotta, Printed in Japan, 1985

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-600643-X C0393

目次

第一章	天と地	5
第二章	路上の人	30
第三章	僧院の内	64
第四章	僧院の外	95
第五章	ピレネーの洞窟	129
第六章	ヴェネツィアの謝肉祭 ^{カルネヴァール}	163
第七章	苦難のトゥルーズ ^{トロワ・エル・ドロワ} へ	194
第八章	異端審問	226
第九章	モンセギユールの山巔城塞	259
第十章	エピローグ	288

装図

CATALAN MAP

(14C.作成, パリ国立図書館蔵)

路上
の
人

第一章 天と地

西欧中世は、現代にもまして映像と記号の世界であった。

人々の大きな部分が文字を知らず、かつ印刷術がまだ発明されていなかったために、羊皮紙に記された聖書をはじめとする筆写本は、すべて教会や僧院の奥深くに秘蔵されていたのである。また普通の平信者は、たとえ文字が読めても、聖書を読むことを禁じられていた。それを読むことは、聖職者の特権であった。

されば平信者にとっては、この天地と昼夜のなかに、周囲の自然と人間を超えたものを読み取ろうとすれば、如何にしても映像と記号の世界に赴かざるをえなかったのである。そうして、この超自然を表象する映像と記号は、西欧中世にあつては、これまた現代にもましてゆたかに存在していて、当時にあつて文盲の平民にも、石に彫り刻まれた本、あるいは描かれた文字、物語として、すぐにも読み解きえたものが、いまではほとんど暗号と化してしまったものがあり、いわゆる図像学などと称される学問の対象となり、専門家の解説を必要としている。

しかしなかには、言うまでもなく、解説などという面倒な作業を必要としないものもまた、数え切れないほど存在しているのである。それは、場所を特定する必要もないほどに、大きな聖堂がありさえすれば、必ずあると言つてよいものである。大旨、聖堂の正面入口の上に、人々をして仰ぎ見なければならぬものとして、実に堂々と、地上の如何なる権力にもまして至上至聖なるものとして存在しているのである。

巨大な石彫による天上に一つの王座が刻み込まれ、そこに一人の大きい者が座している。その表情は、表情というにはあまりにも厳しく、石そのもののようにほとんど無表情である。双の眉は四十五度ほどの角度で釣り上つていて、その末端は髪の毛のなかに消えている。その眉の下は、大きく見開かれていて、しかし、その瞳の焦点がいずれに注がれているかは、明らかではない。天上の、さらにもう一ついと高いところを見ているようでもあれば、人間の地上世界を見はるかしているようでもある。もし地上を見ているものとして見るとすれば、それを見る人は身慄いをしなければならぬであろう。それは人間世界の終末を見、かつその終末を裁く者としてそこに現前しているとししか解しようがないほどにも、その表情はあまりに厳しいからである。頭のまさに中央でわけられた髪の毛は、耳のあたりで二つの房のようなものにまとめられ、残余は肩から胸にかけて流れるように垂れている。髭もまた左右に流れ、顎髭はこれもまた水の流れるように胸に垂れて、咽喉を隠している。そうして頭頂には王冠の如きものをかぶり、色褪せているとはいえ、そこに宝石がいくつも鑲めてあるのが見られる筈である。至天の王者としてのこの者は、その髪と髭同様に流れるような髪をもつ、膝までの寛衣をまとい、よくよく目を凝らし

て見込めば、その寛衣のどこかに紫の色と、金糸銀糸の縋り糸による刺繍の名残りさえが見られるであろう。その左手は、肘を左足の膝に置き、閉じられた一冊の本を持つか、あるいはその本が開かれている場合には、ERGO SUM LUX 我は光なり、と記されている。右手は肘を水平にして掌を見せ、小指と薬指は内側に折られて、地上の人間世界に対して祝福を与えているとも、それとも訓戒を与えているとも、それはいずれとも解し難いのである。かくてその無表情な顔と頭部の背後には円形の光輪があり、その栄光は一層に強調される。両肩の上には、左にAあるいは α （アルファ）、右に ω （オメガ）なる、ギリシア語の第一字母と最終字母が記されて、その者の象徴としている。そうして光輪だけで足らない場合には、この座せる者の全体が、杏仁形の身光によって、あるいは虹によって囲まれていることもある。

かくてこの光輪と身光によって栄光に映えた者の左右上部には、善き人間を表象する二人の天使が配され、その下には、屢々、真に怖るべき怪獣が刻み込まれている。この怪獣は、二頭の場合もあり、また人ひとりと三怪獣の四単位の場合もある。四単位の場合は、四福音書の筆者を象徴するとされているけれども、かの福音書の筆者と、鷲、牛、獅子などのいずれもが大いなる翼をもって、脅迫的なまでの畏怖感をもたせてあることには、如何なる意味があつたものであるか。鷲は、顔貌は猿にさも似ていて、その鋭利なナイフの如き嘴は一杯に開かれ、いまにも何者かの肉を食い裂こうとしている。大いなる両の翼は、石彫ながらに風を切る音が耳を撃つかに思われ、突出した胸部の羽毛はあたかも鉄鎧の如く、爪はこれも鉄の武器かとの観があるのである。次なる角のある牛は、石が波打っているかと思える翼をもち、その前肢の蹄あるいは爪の間に一

冊の本を抱え持っている。狼の如きかと思える翼ある獅子も本を抱え、その犖犖な口からは火を吐いている。そうしてこれらの牛と獅子の胴体には、いくつもの眼が描かれている。あたかも、その複数の眼によって、宇宙の全方角が可視なものであることをでも表象しているかの如くである。

なかには、開かれた口から咽喉もとまでが見えるものもあり、彼等がその者の栄光を咆哮によつて称えているのであることが納得されるのである。そうしてこれらの怪獣どもは、御座みくらから離れて行く形に刻まれてはいるが、すべてみな身を振って首をめぐらし、座せる者を永遠に凝視しているのである。

天上には、かかる怪獣もがいたのであるか。

更にこの半円形の彫刻、あるいは彫きざまれた本の周辺部は、これもまた流れるような寛衣姿の二十四人の聖者たちによつて座せる者を取り囲む形になっている。この二十四人の聖者たちの悉くが、一つずつの楽器をもつて天上の音楽を奏している場合もあり、また数人のみがリユート、ハープなどの楽器を奏していて、その他は、あるいは香料を入れた壺を持ち、あるいは様々な花を持っている場合もある。なかには口を大きく開いて歌唱をしていると見て間違いないものもある。これらの聖者たちの後頭部からは、光輪の代りに、たわやかな葡萄をはじめとする、地に見られるあらゆる果実がのぞいている。そうして半円形にこれらの聖者たちは配されているのであるから、左右の下端の聖者は水平に横になっていて、中央最上部のそれは直立しているのであるが、斜めになっているものも横になっているものも、地の重力からは解放され、その身体的な状

況の如何にかかわらず、その腫のすべては、座せる者を、法悦をもつて注視しているのである。

それが石であることに違いはないものの、生命の充溢と、その光り出るほどの讃仰とは、かかるものであるか、かかる状況以外には、生命の充溢と、その讃仰というものはありえないのであるか、と人をして深く内省させるものをもっているのである。

たとえば西欧で最ももてはやされた巡礼行の、一つの最終点であり目的地であった、スペインはガリシア地方のサンティアゴ・デ・コンポステーラ大聖堂の正面入口、頭上の半円形石彫では、座せる者を取り囲む二十四人の聖者は、悉くがそれぞれに異なる楽器をもつて音楽を奏している。それはあたかも音楽が、その座せる者を讃め称えるがゆえにこそ、石の映像に転化しえた、その奇蹟譚を物語っているかの如くである。

この入口、あるいは門の下に立つとき、たとえばパリのサン・ジャック広場からならば、道中、旅籠屋^{はたな}もろくにはない一五〇〇キロの悪路、ときに出没する泥棒や追剥ぎ、寒暑ともに激烈な氣候に苛め抜かれ傷めつけられて、半病人となつて到着した巡礼たちには、おそらく頭上の、石の樂人たちの奏するその音楽は、それが石に刻まれてあればこそなおさらに、まことに真の天上の音楽と聞えたとして不思議はないであろう。精神上の奇蹟とは、おそらくかかる事象をさすものである。

この二十四人の樂人たちは、一人残らず、いずれの者もが、キリスト教において言われているところの、聖靈なるものにその身そのものを浸されていて、外部や天上からのそれではなく、彼等の内部に、すでに宿っているものとしての啓示によつて内側から身光を發し、その顔は、座せ

しかも、座せる者、自体も、また二十四人の樂人たちも、その顔貌は、よくよくこれを見れば、天上の人々どころか、ガリシアの百姓たちの、親しみ深い村人のそれであることは、一目にして明らかなのである。そのうちの誰それは、何々村の誰それに酷似していると、村人たちならば、それを指摘しうるのであらう。またパリの町人ならば、城壁内の、あるいは城壁外の何々商売人の誰それに似ていると、すぐにも想起しえたであらうと思われる。

10

少くとも想像裡においてもその匂いを嗅ぐことの出来ない人は、まさに二十世紀の現代人であると言つて過誤はないであろう。また中世の人々にとって、たとえば音に關してならば、鳥の鳴き声や獸類の吼え声、森に吹き込む風の音、小川のせせらぎなどの、自然のたてる音以外は、人のたてる音は、すべてどこそこの誰々、あるいはすぐにも特定し得る人々のそれとして認識出来るとしたら、想像力は音、あるいは音楽に關しても果しもなく伸張して行き、天上の音楽を石に刻み込むなどということも困難ではない筈である。石の音楽は、如何なる増幅器をも必要としない。また果実に關しても、たとえば薔薇の花の花芯に苺の実を植え込み、これを聖堂内に飾り込むなどの芸も、すでに日常茶飯である。魚類や鳥類、動物などに關しても、聖堂は魚類図鑑やありとある鳥類、動物などの図鑑をぶちまけたかの觀があり、それは宇宙そのものである。なかには、教会の外壁に、男女媾合の石彫が設けられていて、教会によつてそれが祝認されているものであることを表示しているものまでがある。

座せる者を中心としての、これらの森羅万象、映像、記号、音楽、芳香、花等々に囲まれた聖者たちの顔貌に、もし周囲の村人たちの顔かたちと表情や話し癖などを認めたとしたら、そこに、それは早ければ明日であるかもしれぬ、いつの日にか予定をされている、精霊にひたされた天上世界を、人々が見ることは、きわめて自然なことであつた。

かくて燦々たる陽光と天上の栄光に眩まされた眼が、暗い聖堂内へ入ると、眼がなれる以前に、すでにして色玻璃の薔薇窓からの、七色の彩光に身を浸されることになる。

しかし、教会、あるいは聖堂が映像として、あるいは記号としてもつ全世界、全宇宙は、不幸にして、かかる幸福なものばかりではなかった。

見渡す限り、実りゆたかな葡萄畑がゆるやかに波打っている、南フランスのある丘の上の僧院付き教会の、地下深く薄暗く冷え冷えとした石の窖あぐらの扉に、怖るべきものを見出したことがあった。

眼が暗さになれて来て、案内の修道僧が点としてくれた裸の、暗い電球のタングステンの線が赤く熱してくるにつれて、まず眼に入つて来たものは、後肢を地につけて立ち上つた二頭の、対になった獅子であつた。そのむき出しの鋭い爪はあたかも毒矢の如くであり、これらの獅子が、如何なる不信の徒をも通すまじと、この石窟を守護しているものであることが納得されたのであつた。それだけならば、その大きな櫓うの木きの扉を両側から支える石柱が、長い寛衣をまとつた、不自然なまでに長身な聖人をかたどつてあつたことからしても、いま一度、納得はされるのである。

けれども、それだけではない。立ち上つた二頭の獅子の足許に、あるいはその飢えて凹んだ腹と腹の間に、あるいは蛇のようにとぐろを巻いた尻尾のまわりに、怖るべきものどもが、あたかも闇夜の幻夢のように無数に蠢うごめいている。巨大な蛇が鹿を呑み込んで大海を泳いでい、その横には蟪蛄かきりとしか思えないものが人間の顔をもち、歯を剥き出している。緑青色がかすかに残っている彩色は異様に脂ぎつて光り、その細い昆虫の足で八つの顔をもつ狼をおさえつけ、この狼の八つの、鋸のような歯をもつ口のなかには、それぞれに裸の、瘦せ衰えた人間の女人が銜くはえられてい、よく見ると狼の歯のあいだには多数の亀がいて、女人たちの血を吸っていると見えるのであ

る。また駱駝かと思われる、けれどもこれは首のない瘤の二つある四肢動物がいて、首、あるいは頭がないためか、その胴体に腫の穴と覺しきものをそなえている。細部をもっと見込んで行けば、双方の髪の毛でがんじがらめからめられている裸体の男女があり、九頭の蛇がその二人を見上げて、それぞれに、いまにもその血を吸い、眼に食い込み、人間の持つありとある穴から肉へと入り込もうとしていると見える。そうしてこれらの、悪魔の動物図鑑であるかに見えるものは、この扉の木彫に限るものではなくて、この窖を支える石柱の柱頭や、その柱末には、それぞれに異なる怖るべき怪獣どもが充ち満ちてい、それらのすべてが、戦慄すべき声を、あるものは人の耳には聞えぬ高波長の声を、あるものはこれも人の耳には達せぬ地底の低声をあげ、何事かを告知しているのである。海のものならば鰐から、鮑、鯨、鯨、頭と尾の双方に顔のある両頭蛇、両棲類ならば蟾蜍、蛇類ならば人をその巢にからめ取って喰おうとしている蜘蛛、蠍からはじめて、また地にあるもののなかには、たとえば二羽の鶏が棒に吊した猪を獲物として担いで行くとの、これはユーモラスな景があり、空を飛ぶもののなかには、豚のように太った驚がその爪で、さかさまになった人間の首をおさえつけて肢から呑み込みにかかっているものもある。その横には馬頭魚尾の怪獣がいる。かくて、ありとあらゆるものどもが、四肢を、あるいは胴体を歪め痙攣をさせて、悪魔の軍団の無限の強力さを、誇りをもって物語っているのである。

そうして、もっとも大きな表象としての対の獅子の腹と腹との間に、天上の楽園を追放されたアダムとイヴが、他の一切のおどろおどろしい動物どもと比べてさえ悲惨にも、二人ともが裸に剥かれ、どう仕様もなく、陰部に片手をあてて、この地上を彷徨している。陰部をかくすのに、

無花果の葉だけでは足りないのである。葉は、手をあてがっておかなければ、すぐにもずり落ちてしまうであろう。他の動物たちが、いずれもみな堂々たる翼をもち、色模様の鮮かな毛皮をまとい、あるいは魚鱗に蔽われているのに、何故人間だけが裸なのであるか？

そうして、もしこの扉が開かれるとすると、アダムとイヴは左右に引き裂かれてしまうであろう。

これらの一つ一つを克明に見て行くと、頭が次第に熱くなつて来るかに感じられ、その冷え冷えとした石窟が、あたかも悪魔の炉であるかに思えて来る。そうしてこれらの石窟におさめられてあるものは、修道僧たちの、石の靈柩台の上に置かれた石棺なのである。

アダムとイヴ追放の像があるとすれば、それは地上を表象するものであることは明らかであるが、そのあまりに荒涼として慰めのなさすぎる惨状にうたれて、

「これは何か、地上を表象するものであるか、それとも地獄であるか」

と問うと、蒼白く透きとおるような顔色をしているものの、黒衣の下に精力に満ちた肉体をもつと感じられる修道僧は、

「前者の表象である。地獄図は別のところにある」

と答え、付け加えて、

「これらの怪物どもも、神を讃め称えているのである」と言う。

天上が如上の如くであり、地上がかくの如きものであるとすれば、地獄図はおそらく火と電、